イスラエルのキブツと日本の協同体・その違い・㈢

——連載——

アブラハム・ベンヨセフ
訳　山崎雅代

精神

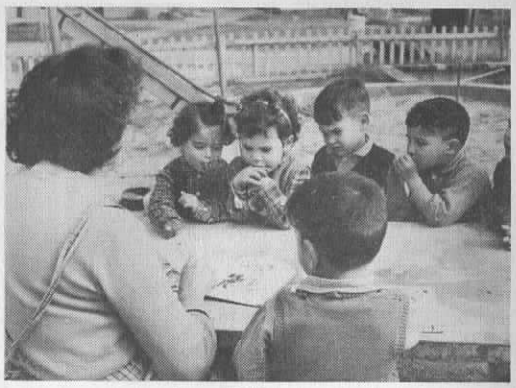
一、イスラエルのキブツ

キブツ、またはキブツ以外の協同体の精神を、言葉で言い表わすのは、非常にむづかしいことであり、また、実際にそこに入って、その精神を感覚的にとらえることも、非常にむづかしいことである。結局は、協同体をつくっている私達が、心理学という学問を知っていると言っても、私達は、心の動きについての基本的なことは、何も知らないのである。なぜなら、私達がいつも論じる非肉体的エネルギーというものが、どんなものかということを、わかっていないからである。たとえ、わかったとしてみても、器械がそれ自体を認識できないように、人間の場合も、心で心を分析できるかどうかは、疑わしい。

しかしながら、東洋では、それが可能であるという明らかな信条がある。少なくとも、この問題に関しては、ある程度までではあるが、考える幾通りかの方法がある。一見すると、彼らは、充分な論理説明によって、解決するというよりは、むしろそれをとび越えてしまうように見えるが、それもまた、大切なことであろう。

今述べた何か謎めいた説明は、これから私の述べるある日本の協同体の連合と、深い関連性を持ってくるものである。それはさておき、本題に戻そう。キブツの精神とは、簡単に言うと、社会主義的なものであるという定義を下すことができる。けれども、この定義は明らかにあいまいであり、これ以上の何もの意味しないし、不充分である。そこで一般的原則に従って、定義されなければならない。文頭に述べたように、『精神』というような言葉を、明確にとらえることはできないので、充分その意味を含めて説明しなければならない。

イスラエルのキブツの場合は、根本的には、精神的基盤が比較的明確である。つまり、この連載の第一回『起源』で示したように、それは、本来シオニズムの精神にある。その精神は、ユダヤ民族主義、即ち、そこには軍隊組織と密接な関係をもつ計り知れない民族の誇りがある。キブツは、軍隊のキャンプより、はるかに大きい。また実際にキブツは全く軍隊とは違う。今日に及んでも、キブツのメンバーは、ある時期を兵隊として過ごさねばならず、多くの場合、徴兵によって精神的にある程度、影響されると見られることはあるかも知れないが、軍隊精神というものを実際、持っていない。しかし、キブツとは、ある人は、メンバーと話し合う際にも、それが軍隊キャンプであったかのように、いつも彼らの心の中に、イスラエルの国旗がはためいている所であると感じている。これは、恐らくは全く間違っているとは言えないが、場合によっては過度に誇張されることがある。

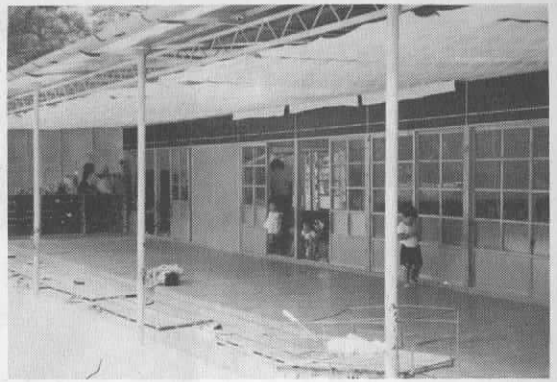


キブツの子供、2～3才

これと同じようなことが、巨大な中国の人民公社や、ソ連やその他のコルホーズなどにも言えるかも知れないが、そういうことは、比較的希薄なようである。さらに言えば、キブツの精神は、社会主義思想である。過去において、それは政治的に強い色彩を持っていた。メンバー達は、キブツを政党の一細胞と見做した。そしてキブツは、社会主義を宣伝する中心的存在であった。厳密に言えば、今日でも、極くわずかのキブツはこの例である。しかし、イスラエルでは、社会主義がおし進められていないので、キブツをそのように見ることは、かなりうすれている。現在では、ヒスタドルートが労働組合の普通の連合のようなものになっている。それ故、労働者の経済組織は、ヒスタドルートの中では、ますます縮少されていく。従来活発な社会主義教育がなされてきたにもかかわらず、現在までに、その教育が広く一般に侵透しているという印象はないように思われる。それでも、多様性をおびた連合体（本来的には、強い政治色を持つ）によって、キブツは、少なくとも、わづかではあるが一般に社会主義的精神を持っている。

その上、協同の精神の、生き生きしたものがある。即ち、分担、友好関係、協調或いは一体制、そして目的とか見通しに関する共通性、などという無形の人間感情がある。社会的動物としての人間には、友愛の情がある。

これは、イスラエルのキブツでは、よく活きている。しかしながら、どんな所でも、必ずそうなされるべきであるのに、なされていないということは、不幸であり、また非常に残念である。以前、月刊キブツに連載されていたモルデハイ・アミタイの、明確で根本的なことについて書かれた『いざ共に』で表わされているようなキブツの真髄でありたいものだ。しかしながら、実際には、しばしば派閥に分裂する。メンバーは、ひんぱんに自分の仕事の領域から出ることはないし、一時的な管理分野から出ることもなく一般的には、他のメンバーを援助することもない。ずいぶん昔、その晩年に著名な社会心理学者となり、極左翼の教育者でもあったシムエル・ゴランは、国際的存在でもあったが、彼は「我々は、上手に協同体を建設するという有益な事業をすることは知っていても、真の友情関係の結び方は、まだ知らない。」と言った。多くの場合、この言葉は、今でも真実である。それ故、


山岸会春日の子供の家

最近、より効果的に、メンバーが精神的に協同するように、集団治療がキブツ内にとり入れられてきている。そうするうちに、正しい仲間意識を持って、国家と社会主義者のベースにうまく協調しながら、すべてではないが多くのキブツ内において、協同の感情は、実に高いレベルにある。

二、日本の協同体

東洋に於ける多くのものが西洋の反対であるように、日本の協同体の精神は全く違ったものであることは、注目に価する。

東洋の観方は、基本的には、外向的よりむしろ内向的であり、物質的よりむしろ精神的であり、動的よりむしろ静的といったものに、向かっているからであり、これは、そんなに驚くことではない。今日、日本が、確かにダイナミックに動いているという事実をもってしても、この記事の文脈を大きく変えるものではない。なぜなら、ほとんどの協同体が位置している農村部では、極端な影響は受けていないからである。もっとも、そうした農村部のどんな地域でも、かなり小規模な工場があり、袋づめの食料品とかテレビもある。そして、農村部に住む人々は、こうしたものを表面的には吸収しているが、精神的には、多かれ少なかれ、以前のままにとどまっている。もちろんそうとは限らない場合もあるが、一般的には、そう考えられる。普通、協同体をつくっているのは、こうした農村部の人々である。ごくわずかの例を除けば、西洋的見解を持つか、あるいは、本当に近代化された町の人々は、そこには、非常に稀である。

それ故、日本の協同体に社会主義者の精神を見つけ出そうとしても無汰である。そうした協同体のメンバー達は、政治的な関心を持っている人は稀れで、彼らは、日本の農村部における民主的組織について、封建時代から存続している官僚制度や、それにまつわる考え方をうち破り、より社会主義的方向に日本を導く責任を持っているものとして協同体をとらえていない。国家の精神というものについては、彼らは、ほとんど配慮していない。

だから、前のイスラエルの協同体の項のあとの方で述べたような、純粋な協同体の精神が、残されているわけである。日本では、それは、実際に著るしく開花しているのがわかる。心理的に日本の協同体をつくっている人々は、個人主義的な西洋人が持っている多くの個人主義的な難問を持っていないので、めざましく、前方に向って思想や計画を練っている。こうした例で最も著しいものは、山岸会の共同体に見られる。そこでは、一般的な文化が、そんなにないという特徴を持っているのだが（傍観者の目から見ると）、山岸会の人々は、全く友好的で、完全な統一と、お互いに歩みよろうとする討論などに基づいて、

組織とは呼べない組織に多大な精神的エネルギーを保持する驚くべき体質を持っている。彼らの討論は、対立するためではなく、統一を計るための慎重な討議である。然るに、イスラエルのキブツ同様、対立を招く傾向にある投票は行なわれない。意見を統一するためには、クエーカー教徒のように、共に協議するだけである。勿論、社会的に最も秀れた方法として、こうして意見の統一を計ることは、いつも正しいとは限らない。ある支配者は、明確な意図もなく、実際には何らかの洗脳をするかも知れない。そうした場合、多くのメンバーは疲れて、半分いねむった状態で同意するかも知れない。またある人は、遠慮しているのかも知れないが、いずれにしろ、彼らを抑圧することには変わりはない。（もし、あなたが協同体にまじめに参加するなら、多分、黙していることが、最良の方法である場合があるということがわかるだろう。）しかし、いずれにしろ、こうした抵抗できない精神は、一般的に見れば、普通の調和と精神的平安の一つである。たとえ、常に一〇〇パーセント正しいものでないにしても、それは注目に値する成果であり、明らかに協同体の生活で、スムーズに事が運ぶようにするものである。

イスラエルのキブツで育くまれたような文化や教養、即ち、仕事の終った後で学習するとか、研究サークルをつくるとか、キブツの人々が通う大学へ進学指導するといったことに専念するようなことは、ヤマギシズム運動の中にはない。それに代って山岸会では、運動の全国的な中心を南と北の主要なキブツに持っているのだが、その両方で大人を対象とした特訓を開催している。そして、この共同体精神を深く追求する特訓は、一週間か、二週間で一コースになっている。この特訓に関して記述することは、この連載の範ちゅうではないが、それは極端な仏教徒のように完全に自己を滅却させるまでにはなっていない。一種の自己を空しくして無私欲になることであり激しい感情を全くなくし、強い仲間意識をもつことなどを連想させる。それは自制心と言えるだろう。けれども、それは西洋人の厳格なそれでもなく、東洋人的な宇宙観に関する根本理念から学んだもので、いわば「一体社会」（One body society）といった言葉に要約できる。もしこうした理念が徹底したなら、人に迷惑をかけるということはないだろう。なぜなら、彼らは仲間とともに、自然の大きな流れの中に流入することになるからである。平和なキブツ生活を送るために何と理想的な訓練であろうか！　しかし、もしイスラエルのキブツメンバーが、彼らの異った精神尺度から、これを見るならば、建設的な改革をしたり、精神的な領域における人間の素晴しい可能性を充分に正当づけるためには、あまりにも整然としすぎた平和であると思うのではないだろうか。それでも、この問題は、ここでは取り扱わないが、議論の余地がある。

ところで、他の日本の共同体の場合は、どうであろうか。ヤマギシズムという考え方がなくても、驚くべきことに、すべての日本の共同体は、共同体意識を強化する同じような傾向をもっている。それらはまだ、概して完成の域に達していないが、今日無数にあるアメリカの小さな若者のコミューンが持つ目的を想い出させる。東洋的な精神をもつおかげで、それほど意識的な努力をしなくても、あるいは少しは努力しているかも知れないが、共同体精神が生じ、それが実行される。強力な指導力を与えられて、共同体精神は発展し、維持される。日本の人々は、社会的にどのようにふるまうかを知っている。そして、共同

38ページへつづく

26日のマスプロ講座は一般に公開され『高度産業国家における福祉社会実現のための協同組合と労働組合の役割』というテーマで、パネルディスカッションが行なわれた。

パネラーは、高橋正雄（経済学博士、九州大学名誉教授）、湧井安太郎（灘神戸生活協同組合専務理事）、和田春生（民社党機関紙局長、元国際自由労連ＡＲＯ会長）、神代和俊（経済学博士、横浜国立大学教授）、藤沢宏光（中央協同組合学園教授）の諸先生。

テーマそのものが、あまりにも広範囲にわたるもので、パネラーの間でも意見が充分にまとまらず、時間的にも充分でなかった。

最後に、コメンティターのアキバさんが、「労働組合と協同組合運動が、単に組合員の利益を守ることに終止するなれば、人間社会はよくならない。よりよい社会の建設という最終目的を忘れてはならない。」と結んだ。

25ページより

体をつくり、その中で生活していくことになっても、その中でのふるまい方を心得ている。強い友好関係に基づいた共同体精神は、東山産業のような、かなり自由な結合体であるモシャブ・シトウフイにも見られ、そこを訪れた人は、はっきりと内部の事情がわからなくても、即座に、そのことを感じとる。その他の日本の共同体についても、大まかにとらえれば、少なくとも、似たりよったりの雰囲気である。

ただ、宗教的共同体の場合は、特別な精神があり、それは明らかに宗教的なものであり、だれでも崇高な気分に向けられる。彼らは、容易に精神的な衝突をすることはできない。（たとえ反論することが不可能でなくとも、そこにあるものもまた教義の一つであるだろう。）

イスラエルには、ごくわずかの宗教キブツがあるだけであるが、ここで、我々はイスラエルのキブツを見てみよう。彼等もまた、もちろんこの結びつけるもの、崇高な心掛けを持っている。といっても、それは、ほんの小さな接点にすぎない。さて、今まで述べてきたように、概して、イスラエルのキブツと、日本の共同体の精神とか感情は、別々の性質を持っている。けれども、双方が、互いに全く関係を持っていないと、断言することは出来ない。イスラエルのキブツも、日本の共同体も、同じ密接な人間関係を持った共同体社会なのである。

――つづく――

和解を望む
アラブとイスラエル

手塚信吉

旧約聖書には、全能の神がユダヤ民族の祖アブラハムにあらわれて、「カナンの地、イスラエルを永久所有地として与える」と約束したとされている。これは紀元前一七〇〇年ごろのことであるから、今から三六〇〇余年も昔の話であるが、聖書の民ユダヤ人は、カナンの地は神から与えられたユダヤ民族のための国土であるという。だが、アラブ人に言わせると、カナンの地に先住した民族はアラビヤ半島から移住したアラブ人であり、先住権はアラブ側にあると主張している。

このユダヤ民族とアラブ民族との争いは、三六〇〇年も前から続いており、そのために却って他民族にあやつられたり、奪われたりして、歴史的にみても両民族ともに悲劇のくりかえしであった。今後といえども、相反目の続くかぎり同じであろう。

両民族も祖先にさかのぼって行くと、同じセム族の子孫であって、血統的兄弟民族であり、因縁に目覚めて和解握手が成れば、ただに中東各国のためばかりでなく、世界平和のために幸せである。

長い南北ベトナム戦火もおわり、米ソ和解も進展しており、中東紛争解決の潮時であろう。お互に小異を捨てて眼を足元に向けてはどうか。あの広大無辺の中東大砂漠地帯の一大開発に相協力してはどうか。不毛の砂漠化していたパレスチナの地を、わずか半世紀足らずで豊饒沃野に一変せしめたユダヤ民族の試練は貴い。その経験と知性と経済力とをアラブの土地と労働力とに結合して、あの大砂漠地帯の開発に提携協力してはどうか。

紀元前一〇〇〇年ごろのユーフラテス川流域は世界の穀倉地帯と言われ、けんらんたる文化の中心地であったという。両民族の和解なれば、再びその繁栄の出現も夢ではない。いや、世界の新文化は中東からと言うことにもなろう。

世界三大宗教の発祥地

謎の国イスラエル。何となく心引かれる国である。世界三大宗教の発祥地エルサレムは、宗教に無関係な人でも、不思議な魅力を感ずるであろう。五〇〇〇年の歴史を秘めたパレスチナの地は、欧亜文化の接点であり、幾多の悲劇のくり返えしもあったが、そこに発生したキブツ共同社会の新原理は、人類共存の原理でもあり、世界の若者をさし招いている。

苦難の民族、ユダヤ人はその苦難を克服して永遠を得た。古代文化の主人公であった、エジプト民族も、ギリシャ民族も、ローマ民族も、あとかたもなく亡び去った中で、ユダヤ民族だけは、世界の至るところに厳として繁栄し、再建イスラエルの栄光をみた。

国亡びて二千年、流浪の民として世界各国に散在し、虐げられた民族として悲劇の主人公でもあった。ヨーロッパ各国とも、ユダヤ人には土地の所有を認めず、兵役にもとられなかった。だから、昔からユダヤ人は商人になるか、学者、医者、音楽家にでもならなければ出世の道もなかった。そのため、二千年の永い試練が民族性となって、財界有力者、大学者、大音楽家等にユダヤ人が非常に多いのであろう。ノーベル賞受賞者を四三人も出している民族は、世界中でユダヤ民族だけである。

世界第一次大戦後のロシア革命当時、ユダヤ人圧迫の難をのがれて、大西洋を渡ったユダヤ人の子孫が、今日の大勢力をもつアメリカユダヤ人であり、当時パレスチナに移住したユダヤ人が、再建イスラエルの中心人物となっている。

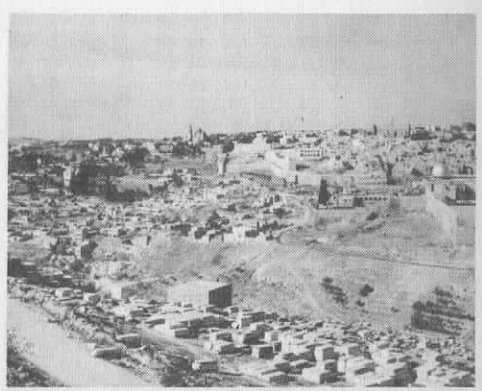
第二次世界大戦中、ヨーロッパ系ユダヤ人一千万人のうち六百万人が、ドイツナチの魔手に倒れ、その魔手を免れてパレスチナに渡ったユダヤ人によって、再建イスラエルを決定的なものとした。アメリカに逃れたユダヤ人の学力技術力がドイツ敗北の最大原因となっている。

世界をリードするかユダヤ人

最近ドル不安でアメリカ経済界の旗色が少々芳しくないが、GNPも桁外れの世界一であり、日本の国家予算にも匹敵するぐらいの株式会社も何社もある巨大財力である。石油、石炭などの消費量をみても、全世界の五〇%をアメリカ一ヶ国で使用している。自動車台数をみても、世界中の四七%を一国で動かしている。その巨大なアメリカ経済を牛耳っているのが、ユダヤ財閥である。

昔話になるが、日露戦争の真最中に、日本は戦費に困って、ロンドン市場で日本国債を発行して売出したが、第一回は何とか成功したが、第二回目は日本の敗戦を恐れて引受手がない。担当財務官であった高橋是清さんも青息吐息であった。その時である。日本と運命を共にする覚悟でかんぜんとして引受けたのが、アメリカユダヤ人、シフ氏であった。

そして、軍備を充実し、古今未曾有の日本海大会戦の快勝となった。シフ氏の先見の明もさることながら、本質的に日本贔屓の多い民族でもある。世界を動かすニューヨーク財界の支配者は今もユダヤ人である。その他でも政治、経済、文学、哲学、美術、音楽等々、各分野における一流人物に、ユダヤ人またはユダヤ系人物が、断然多いのに気付くであろう。もしこの地球上にユダヤ民族がいなかっ



エルサレムの遠景

たなら、世界文化史上は大分変ったものになっていたであろう。

資本主義理論の産みの親も、その育ての親もユダヤ人、社会主義理論の産みの親も、その育ての親もユダヤ人であった。そして、その何れも時代々々の人類社会の進歩発展に大きな役割をはたしてきた。だが、どんな立派な主義も思想も、時代の変化で着丈の合わない古洋服同様にもなろう。それが時代の進歩というものである。

今の地球は、人類の大激増と科学文化の急発展との両攻めにあって、地球が狭くなりすぎた。資源の枯渇が目立ってきた。競争は進歩の母どころか自滅道の外の何物でもない。生産中心の資本主義も、分配中心の社会主義も、共に対立観を経済原理とするものであって、どうひねくり廻しても、世知辛い世相の救いには役立たない。今必要なものは、人類共存の新原理に基づく協同協力社会の実現である。それが、すでに六〇年の歴史を持ち、新興国イスラエルに発達しつつあるキブツ共同体社会である。またしてもユダヤ民族の偉大なる世界への贈り物であろう。共にセム族の子孫であるアラブ族もユダヤ族も、小異を捨てて大同につき、キブツ思想精神で握手して貰いたい。

フィリッピンのモシャブを訪ねて

ベンジャミン・マウター
（イスラエルの農業技師）

1

その地区の人々はこれをフイリッピン・モシャブと呼んでいる。フイリッピンとイスラエルの合同計画を取材すべく、ある朝早くヨラムと私はマニラを発った。「とでも長い大変な旅になるぞ」と、ヨラムは私に忠告した。

ヨラムはイスラエルのモシャブ・オロットのメンバーである。彼はもう一人の友人アサ・モラムといっしょに、バリオ・リカルテ村で働らいている。アサはキブツ・ダンのメンバーである。

フイリッピン国内で計画が進んでいる協同体のパイオニアとして、このバリオ・リカルテ村が選ばれた。ヨラムは田舎道をドライブしながら「一九七〇年、フイリッピンとイスラエルの二国間で、モデル的なモシャブを創設する契約が取り交わされたのだ」と説明した。

最初、この契約が取り交わされた頃は、この地区にモデル協同体が実現するとは誰も考えていなかった。過去に、そうした計画はあったが、すべて失敗に終っていた。そして、この地区の住民は、個々に独立生計を営なんでいた。ヨラム達の努力は、これを共同化に向けて行ったのである。

パンパグナ地区を走っていた時、我々の目に入って来た風景は、乾期で黄色くなった稲の刈株だけが残った田んぼばかりだった。乾いた田んぼは、雨期が来るのを待ちのぞんでいた。人影など全くなかった。隔絶された所々に、洪水がもたらした灌漑で、小さな野菜畑が点在していた。この地方は、雨期になると台風と洪水に毎年見舞われ、天災に悩まされている。

北東に向って走るにつけ、まわりの景色はだんだんと変って行った。乾燥状態はますますひどくなり、水田は見られなくなっていった。そして、この高地にフイリッピン・モシャブはある。この国のいたる所が洪水に見舞われていても、この高地たけは洪水の被害がなかったが、この付近の農家の人々は、米の収穫後は次の植付けまで仕事がなかった。

協同化が実現してから、その姿が一変したのである。私達のジープは、ものすごい砂塵をまきあげながら村に着いた。村の人々が、歓迎の笑みをうかべる中で、私達は村の中央の建物のそばで車をとめた。

2

「この事務所が私達の指導センターなんだ。ここから私達の運動が始まったのさ。ここに着いて、地方研究所の協力のもとに協同体を創っていったのさ」とヨラムは私に説明した。フイリッピンの他の地域では、10人～15人の村人しか参加しない小さな共同体が多い。しかし、ここではこの指導センターが、村人達の要求や、可能性のある種々な考えなどをよく聞き、それをとり入れるようにした。そして、村人達との間に友愛と信頼関係が育って行った。

アサが一軒の家の庭先から姿を現わし、私達の村めぐりの仲間に加わった。七、八軒の家を訪ね、日頃のこまごました事柄を話し合った。

村の中で一番大きな建物は、何といってもまず倉庫である。アサは、彼等がやり遂げた業績の内で大きな事柄は、やはりこの倉庫の建設だと思っている。政府の供与したプレハブ建材を使って、協同体のメンバーは自発的に建築作業に加わった。彼等の労働で建てたのだ。

まず、収穫された米がこの倉庫に納められた。そして共同販売が行なわれた。もちろん、各戸にそれぞれ次の年に自分達が食べる分は保有米として残したが、自分で作った作物を自分勝手に個人で出荷販売しない事になった。また、倉庫には、肥料や殺虫剤が共同購入されて貯蔵された。

道路は村の真中を縦によぎっている。その両脇に農家が並んでいる。私達は、その中の一軒の庭先を通りぬけて行った。するとそこには、目のとどく限り広い、黄一色の田んぼが広がっていた。ところどころで、水牛が二、三頭稲の切株をかじっていた。土地の起伏が続き、田んぼは縞のようになって続いていた。突然緑が目に映った。緑色の畑である。

3

最初、アサやヨラムがここに来た時、「ここにも水があるはずですよ」と言ったら、村の人達は誰も信じなかった、とアサが言っていた。この緑の畑に近づいた時、年配のおだやかな一人の農夫に出合った。「この協同体の会長ですよ」とヨラムが紹介してくれた。ここに、この農夫の仕事場がある。ヨラムは続けた。「ここが彼の持場です。彼は、ここでの水さしがの仕事に快く協力してくれた最初の農民です。全く驚いたことには、わづか四日の試掘で水位に達することができました。そこで、もう少し掘り下げ、コンクリートの

パイプを入れて水を吸い上げたのです。この小さなガソリンポンプも農民達の貯金で購入されました。この地方では灌漑農法の技術が知られていなかったのです。私達が来てからその開発が進んで行きました。これは、トウモロコシや豆類の苗床です。トウモロコシは一日一日ぐんぐん伸び、ごらんのように、良い作物が栽培されるようになりました。豆の収穫はもう始まりましたよ。」

あの農夫が、にこにこしながら私達に近づいて来たのは、私達を歓迎するためにこちらに来たのではなかった。彼はポンプに近づいて行き、これを始動した。そして田んぼに水をひき入れ始めた。

今後、この井戸水をどれだけ利用できるのかは、まだよくわかっていない。10アールの田んぼに灌水すると水位は下ってしまうが、二時間も待てば水位は元のレベルにもどっている。もっと深く掘れば、もっと多くの水が出るにちがいない。この地方の農民にとっては、米が唯一の現金作物であった。今まで、米だけを作って来た農地に灌漑が可能となり、米以外の作物の栽培が可能になった。そして同じ面積の土地から、今までの五倍以上の収入を見積ることができるようになった。

ヨラムは、あけっぴろげに笑いながら「こっちへ来いよ。違うものを見せるから。」と言った。あっちこっちに井戸があり、今では、そこで働いている人々に、いちいち説明してまわる必要がなくなっていた。農民達は、自分達で卒先して働くようになっている。今後の開発財源は乏しくなったが、今までに彼等がやって来た事は立派に実っている。

フアガログ語（この土地の言葉）で書かれた説明書が掲示板に、ところどころに掲示されて立っていた。それには、この地区が村の実験センターとして、現在行なっている農業状況が説明してあるとのことだった。評判は近くの村々に広がり、招待しないのに、地方の農民達が、しょっちゅう見聞にやって来る。

4

村のセンターに戻る途中で、ブロックを積んで家を建てている人達に出会った。この家は、或る農家の新築家屋で、近所の人々が総出でこれを手伝っている。これは村内に於ける相互扶助の一例である。こうして、農民達は、協力し合う事によって、村がだんだん変って行くのがわかるようになって来た。土着の農家は、棒くいの土台の上に葦のゴザで覆ったもので、とても台風に耐えられる代物ではない。今では、一階建ではあるが、石の床でがっちりした外観も立派な家ができて来た。これは、この村が経済的にも生活水準が向上して来た事を示す一つのバロメーターでもある。

私達はジープにもどった。「ちょっとそこまで行こう。」ヨラムは、ある家の庭に車を止めた。中から一人の婦人が赤ん坊を抱いて私達を出迎えた。婦人がヨラムに赤ん坊を見せた時、アサは私に写真を撮っておくようにと云って、私を後ろからつついた。婦人は「イスラエルに感謝しています。」と明るい笑みを浮べて言った。また、こうも言った。「この子をヨラムと呼んでいるんですよ」と。

私達はヨラムの運転するジープで帰途についた。